

【相談内容】

No94.鉄筋かぶりがとれていない場合における断面修復工について

- 高度成長期に施工された橋梁では、鉄筋かぶりが取れていないものも多く、断面修復工（左官工法）を実施する際、現況どおり修復すると鉄筋かぶりがほぼないことがある。
- 鉄筋かぶりがないまま断面修復工を施工すると、再劣化する可能性も考えられるが、最小でどれくらいの厚さで施工しなければならないという基準等があれば助言を頂きたい。

【助言内容】

- 断面修復工（左官工法）の最小施工厚みについて、技術基準等があるか否かの相談であるが当センターで確認できる範囲では、本内容の技術基準は確認できなかった。
- ただし、「橋梁コンクリート部材の補修設計・施工の手引き（コンクリート構造物維持管理技術研究会）」には「最小施工厚み5mm以上」との記載はある。
- また、コンクリート構造物の補修工法の選定方法、選定した補修工法の設計・施工方法に至るまで、特に早期の再劣化を防ぐための施工管理の要点をまとめた「土木研究所資料 コンクリート構造物の補修対策施工マニュアル（土木研究所）」が参考となる。
- なお、左官工法についても施工時の留意点等が記載されている。

（補足）

- 施工時のかぶり不足を原因とする剥離・鉄筋露出では、同じ橋の同種の部材でも同じ原因によるかぶり不足の可能性が高く、先行して剥離・鉄筋露出が生じている箇所以外でも順次同様の損傷が現れたり、既に内部で鋼材が腐食していることがある。